

松代藩文化施設管理事務所だより

# 六<sup>む</sup>連<sup>れん</sup>銭<sup>せん</sup>

第5号



水心秋月亭図巻

(真田宝物館蔵)

## 特集

## 真田宝物館の機能

## 真田宝物館開館の経緯

昭和四一年五月、真田幸治氏は松代町にある「真田家に関連の土地及び建物を松代町に売却するにあたり、真田家重代に伝承された来た宝物一切」を松代町(昭和四一年一〇月一六日の長野市に編入)に寄付された。この目的は、「松代藩由来のもので、歴史的にも松代の象徴であるので学術文化の研究に資するため」であった。そしてこの寄付条件の一つとして、昭和四三年度までに「広く公開できる施設を建設して、学術文化に貢献できるような配慮すること」をあげられた。これをうけ、昭和三八年三月に松代高等学校建物として建設したものを、昭和四四年六月に宝物展示館に改造がすみ、同年七月一日に開館となった。これが、真田宝物館が開館に至るまでの経緯です。そして更に、来年度で開館以来三〇周年となります。

## 真田家の宝物と展示

さて、真田幸治氏が宝物一切の寄付をされるにあたって、ここまで「学術文化」への貢献にこだわられたのには理由があります。そもそも真田家にあつては、明治時代以来、昭和の初めにかけて、地元・

松代で宝物の展示を数多く行っています。明治三一年から昭和一三年の四〇年の間だけでも少なくとも七回あります。こうした展示には、当時・松代小学校で教鞭をとっていた、長岡助次郎氏による宝物の整理、展示業務の補助がありました(山中さゆり「近代における真田家資料の展示と整理」長岡助次郎資料から)『松代』一(一)号)。松代における展示会のうち、明治三一年一二月一九日から二二日までの四日間行われた、松代尋常小学校改築落成記念の展覧会では、実に一万人もの観覧者がありました。これは、言うまでもなく、地元の人々に限られることは確かです。なお、この展示会には、真田家のほかに、八田呉服店(五六一点)や旧藩士の家などから多くの資料を借り受けて展示されています。

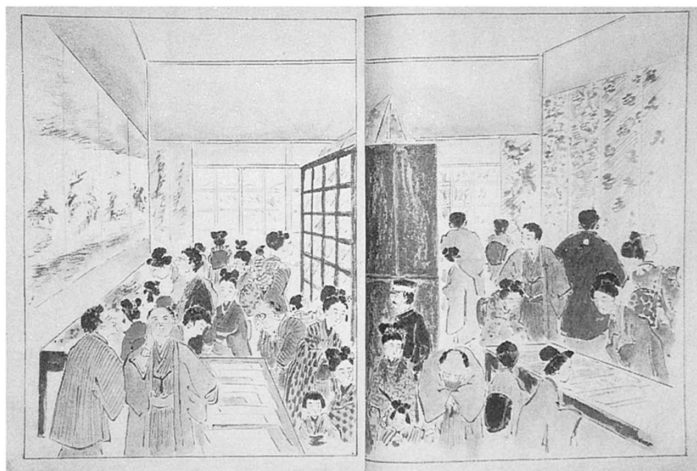
真田家による重代宝物の展示は、松代のみならず、東京や上田の展覧会にも出品されるなど、非常に多くの展示会にその宝物が顔を出していました。このように、真田家にあつては宝物を「学術文化の研究に資する」ことが日常的な行為としてなされていたことが推定できるので、そしてこうした展示を通じて、地元・松代の人々は、直接真田家重代の宝物に触れる機会を持ち、松代の文化財の奥深さを肌で感じたはずで

## 真田宝物館は

## 「観光施設」か

現在、真田宝物館は年間入館者数が十五万人前後あります。これは、全国の博物館・美術館の年間平均入館者数が八万五千人であるのに比べると、実に倍以上の実績です。すなわち、数字の上では極めて効率のよい施設ということとなります。しかし利用者層を検討すると、あながち肯定的には受け取れません。

真田宝物館は、従来から「観光施設」といわれ、主に県外からの人々を対象に展示が行われてきました。しかし、本質的に「観光施設」とはどのような概念なのでしょう。観光という行為には、宝物館のような観覧施設を「見る」だけでなく、「休ん」だり「食べ」たりすること、お土産などを「買う」ことも大きな指標となります。いや、むしろそちらのウエイトのほうが大きいのではないのでしょうか。真田宝物館の場合、「見る」だけの施設です。そのため、狭義の「観光施設」であっても、一般的に認識されているような「観光施設」ではないのです。「見る」行為は、なにも「観光」にこだわらなくても、「学術文化」の研究にも共通することです。「観光」は、「食べる」「買う」行



長岡助次郎が松代尋常小学校で行った展示会の様子

明治四一年に行われたこの展示会には、松代の多くの文化財が集められた。地元の人々が興味深げに観覧している。子供たちの姿も多く見受けられる。

(長岡助次郎関係資料「当館蔵」)

為、また、それを通じて、地元の人々との交流のなかでこそはじめて、「観光」でこられた人々に安らぎを与えるのでしよう。

このように、真田宝物館は展示を「見る」という行為を三〇年間すすめてきました。しかし、地元・松代をはじめとする長野市民の利用はというと、非常に問題があります。

## 少ない子供の利用

真田宝物館の入館者数は、ここ一〇年間の推移として、昭和六三年の二二万五千人をピークに減少傾向をたどっています。この要因は、真田宝物館の「見せ方」に問題があるわけではなく、むしろ、国内旅行全般の動向を反映しているといえます。特に減少傾向に顕著な影響を与えているのが、団体バスの減少です。昭和六三年を基準として考えた場合、平成八年では実に四〇%の減少です。しかし、個人客は八%の減少にとどまっています。こうした、団体旅行の減少は、繰り返えし述べると、全国的な傾向で真田宝物館の特殊性ではありません。

さて、真田宝物館の入館者総数に占める小中学生の比率は実に五・六%です。これは、周辺小中学校の遠足などを含めた比率です。全国的な傾向は不明ですが、例えば、長野市立博物館の場合、平成四年度のデータでは、入館者総数に占める小中学生の比率は二六%です。同

じ長野市の施設であり、また、同じ展示施設でありながら、小中学生の観覧比率には五倍もの開きがあるのです。現在、両施設とも、小中学生が休みの第二・第四土曜日を中心として小中学生の無料開放日を設けていますが、平成九年度は一・二・三人しかその恩恵に預かっていません。対して、長野市立博物館では、平成九年度に、実に四七六二人の小中学生が無料開放の日を利用して利用しています。長野市立博物館の場合、平成九年度の小中学生の有料入場者数が二・三九七人ですから、きわめて効率的であることがわかります。

真田宝物館における子供の利用の減少は、近年とくに顕著となってきました。平成八年度の団体小中学生の入館者数は、昭和六一年度の四二・八%にまで落ち込んでいます。また、個人の小中学生の入館者数比でも、平成八年度の入館者数は、昭和六一年度の七二・一%にまで落ちています。対して、大人の入館者数は、平成八年度は昭和六一年度の九三・六%にとどまっています。このように、真田宝物館は、大人のそれも高齢者層の安定的な入館者を保持しているものの、学校の遠足や、家族連れの入館者が極端に減っているのです。

## 再び「学術文化の

## 研究に資する」とは

さて、開館三〇周年をまじかに控えて、

もう一度、「真田宝物館とは」どうあるべきなのかを問い直すときがきました。真田幸治氏が、寄付の目的として明示された、「学術文化の研究に資する」ことはどの程度成果としてあらわれてきたのでしょうか。「広く公開できる施設」として真田宝物館がつけられたわけですが、何も展示だけが公開ではありません。また、研究者だけが「学術文化の研究」をするわけでもありません。ことに、次世代を担う子供たちにとって、こうしたすばらしい文化財を目の当たりにすることで、豊かな心を育んだり、文化財の大切さや、ひいては地域に生きる誇りが生まれてくるのではないのでしょうか。現在危惧するのは、こうしたすばらしい文化財がありながら、学校教育や子供たちの生活の中に生かされていないということです。「展示してある絵の、ウサギがかわいかった。」こうした子供の声があったとすれば、それは「学術文化の研究」の第一歩であるはずですが、なにも、難しい論理や、堅苦しい書籍の中ばかり「学術文化」があるわけではないはずですが。

松代には、長岡助次郎という先覚者がいました。先にも触れたように、松代小学校の教員でありながら、多くの展覧会を松代で行っています。そうしたなかで、地域の人々は、松代の文化に直接触れ、それに誇りを持ったのです。従来のように、「観光施設」であるという認識は捨てないまでも、今まで忘れられていた、子供たちのための施設ということも考えて

いく必要があるでしょう。また、松代の文化とは何かという問いに対して、地域の人々が誇らしげに来訪者に語りかけられるようなまちづくりも必要なのではないでしょうか。

長野オリンピックには多くの人々が長野を訪れた。しかし、真田宝物館にはオリンピック観戦者が立ち寄る光景はほとんど見られなかった。国際化とは、自国の文化を理解し、それを伝えることから始まるのではないだろうか。



